
書簡からみるフィヒテ哲学の構想

—知識学成立以前—

阿部 典子

Fichtes Gedankengang in seinen Briefen

—vor der Wissenschaftslehre—

Noriko ABE

1. はじめに

哲学者の著作はその時点におけるひとつの完成が示されているものであり、また、我々が思想に触れるのはほとんどの場合その著作を通してである。もちろん、たとえばフィヒテの場合もそうなのであるが、思想の形成過程や変遷を複数の著作において順次提示していく場合も少なくはない。しかしその場合であっても著作は哲学者の思索がひとつの形にまとめられたものであり、我々はそれを通じて哲学者の思想に触れることになるのである。

フィヒテが哲学の道を歩みだすきっかけとなったのはカント哲学との出会いであった。そして、カント哲学の真価を誰も理解していないことをいち早く感じ取り、カント哲学をわかりやすい形で公にして世に広めることを自分の仕事と考えるようになったのである。そのための思索がフィヒテ独自の知識学という著作につながっていった。フィヒテの生涯において知識学は何度も書き改められたが、フィヒテ自身はいずれの著作においてもカントの精神から離れているものではないと確信していた。その意味ではフィヒテの著作は常にカント哲学に触れた当初の目的を維持しているともいえるであろう。

本論では、フィヒテがカント哲学に触れてから『全知識学の基礎』（1794/95）においてフィヒテ自身の哲学を著作としてまとめる⁽¹⁾にいたるまでの過程をその時期の書簡を中心に跡付け、フィヒテ哲学の特徴を見てみたい。

フィヒテ自身がその後期哲学において示しているように、言葉による表現従って概念的把握は、物事を固定して理解した相を示すといえる。言葉に表現されることによって当の事柄が明確になると同時に、その言葉によって理解は固定化され、当の事柄も固定化されるのである。この点に言葉あるいは概念の本質があるといえるだろう。著作によって哲学者の思想に触れるとき、それは哲学者の思想そのものではあるにしても、その思想を概念において固定的に表現したものとなっているのである。考えを文字に表すということはそういうことである。さらに、考えようとする対象が形而上的なものである場合には、文字という表現手段では捉えきれない場合も多いに違いない。フィヒテが知識学を何度も叙述した理由のひとつがこの点であるが、しかしながら、ロゴスという哲学誕生以来の特徴から見て、言葉による表現を本質とするのが哲学である。そうであるならば、哲学者の思想をより深く理解するうえで、著作に取り組むだけではなく、その哲学者の発したそのほかの言葉、さらには生きた環境などを考慮するころも大きな手がかりとなるに違いない。フィヒテの時代、特に書簡でのやり取りでは哲学的な問題が議論されることも多く、著作としてまとめたものとはまた違った角度からその思想を吟味することができると思われる。このような理由から、フィヒテが知識学で示そうとした哲学の立場を、本論では特に書簡を手がかりとして確認してみたい。

2. 哲学との出会い

フィヒテ(1762-1814)は学校に行くことも困難であるような貧しい家に生まれたが、もって生まれたすばらしい記憶力を見込まれてミルティッツ男爵という後見人に恵まれたことにより、学校での勉学が可能になる。大学時代には説教師になろうと考え神学の講義を受講したが、そのころミルティッツ家からの援助が途絶えてしまう。その後生活のため家庭教師をすることになるがうまくいかず、「勇気以外にほとんどすべてのものを失ってしまいました」と手紙⁽²⁾に書かざるを得ないほどの「絶望状態」⁽³⁾に陥ってしまっていた。困窮状態にありながらも説教師あるいは著述家になるために様々な計画を立て、色々な人たち、特に有識者たちとのつながりを得ようとしていたとき、1790年、「ひとりの学生がカント哲学について個人的に教えを受けたい」⁽⁴⁾と申し出てくるのである。金銭的にはほんのわずかの助けにしかならず、しかも短い期間に限られたものではあったが、フィヒテはその申し出を受け入れたのである。これ

がカント哲学との初めての出会いであった。その後フィヒテが書く手紙にはカントの名前が頻繁に登場することになる。カント哲学との出会いそしてそれに続くカント哲学との関係をフィヒテは次のように書簡で伝えている。

将来の妻ヨハンナ・ラーン⁽⁵⁾には「少し前に本来的な学問、高次の哲学に属する仕事を始めた」と伝えている。「すべての希望が挫折したことを知る直前」に「まったくの偶然と思われる」前述の学生の申し出により、「カント哲学に没頭」することになったのである。フィヒテにとっても「カント哲学の難解さはあらゆる想像を超えて」おり、しかもその原則は「人間生活には直接影響のない思弁」であった。しかしそれを理解しやすいようにして普及することは、世間に対しての「貢献」であり「功績」であると思われたのである。それゆえフィヒテはそのために少なくとも「生涯の2、3年はかける」ことになると考え、また、その間に「書くものはすべてこの哲学に関するものになるだろう」と感じたのである。カント哲学に触れることによってフィヒテには「一日でさえ貴重」であると感じられるようになり、その結果日常生活も一変することになる。⁽⁶⁾

この書簡から理解する限り、フィヒテがカント哲学から得た第一のことは「人間の意志は自由であること」、そして「我々の生存の目的は幸福ではなく、幸福に値するものであること」に対する確信であった。それ以前のフィヒテは人間における自由を期待しまた信じながらも、その確信を得られなかった。それはフィヒテがそれまでに歩んできた生活の厳しさに由来することでもあり、納得できる理論的証明がなされえなかったことにもよる。そのフィヒテに、カント哲学は人間の自由を証明する理論として理解されたのである。これはフィヒテがカントの『純粋理性批判』以上に『実践理性批判』に強い感銘を受けたことを意味する。実際友人宛の書簡では、「『実践理性批判』を読んで以来新しい世界に生きています⁽⁷⁾」とその変化の大きさを述べている。この変化の大きさは「革命」⁽⁸⁾とよびうる程のものであった。「決して証明されえないと信じていたことがら、たとえば絶対的自由や義務の概念などが証明」⁽⁷⁾されていたからにほかならない。学生の申し出によって読むことになったカント哲学は『純粋理性批判』であったが、さらに『実践理性批判』に読み進むことで、「完全にカント哲学に没頭している」と言いうるまでになるのである。『実践理性批判』が与えた影響はこのように極めて大きいものであったが、もちろん『実践理性批判』が「純粋理性批判の研究なしには理解できない」⁽⁸⁾という関係も捉えていた。

しかしながら、フィヒテは哲学で身を立てようとはまだ考えていなかったようである。カント哲学を世に広めるための研究に没頭しながらもフィヒテ自身の持つ「雄弁の素質をおろそかに」してしまうつもりはなく、それどころか、

カント哲学研究は「雄弁を高貴にするのに寄与する」と捉えられていたのである。カント哲学に関する著作を執筆することでカントの「原則を普及し、雄弁によって人間の心に作用」するよう働くつもりであり、あくまで「説教師になることを使命」と捉えていた。フィヒテにはその時代が「道徳がその根源まで腐敗してしまった時代」⁽⁵⁾と感ぜられていた。「いわゆる上流階級と呼ばれる人たちの風紀がとても乱れている」⁽⁸⁾とも述べている。そしてその原因を「人間のあらゆる行為は必然的である」という考え方が広まっているという点に指摘し、この「命題からは社会にとって非常に有害な結果が生じてくる」のみであると述べている。それゆえ、人間の意志が自由であることを証明しているカント哲学を世に広めることが道徳的に退廃した時代への大きな貢献になると確信したのであり、さらには説教師にとっての高貴な仕事であると評価したのである。

このような志を胸に秘めたカント研究の日々を、フィヒテは「幸せ」と表現している。「日一日とパンにさえ困るようになりながら、それでもその時はおそらく、この広い世の中で私はもっとも幸せな人間の一人でした」⁽³⁾と数ヶ月後フィヒテは弟に書き送っているのである。将来への見通しが立たず不安になっていたフィヒテの心によく落ち着きが見え始め、カント哲学研究という具体的な方向に向かうことができるようになったのである。

3. 知識学へ

大きな影響を受けたカント本人との出会いは、1791年フィヒテがカントを訪問することによってかなった。フィヒテにはカント本人との接点がなにもなかったために、「推薦状の代わりに『あらゆる啓示批判の試み』を書いて謹呈する」⁽⁹⁾ことを思いつき、それをわずかの期間で書き上げ、カントに送ったのである。フィヒテ自身はその出来ばえに満足してはいなかったものの、カントの評価は高く、最終的にその出版の世話を引き受けてくれることになる。1792年、たまたま匿名での出版がなされることでカントの著作と勘違いされ、カント自身の訂正と紹介によってフィヒテは哲学者として華々しく世に登場することになった。

カント哲学を世に広めるべく研究を重ねることで、フィヒテはカント哲学の本質ひいては哲学の本質に迫っていくことになる。フィヒテは、カント哲学に対して「誤解以外の何かに基づいていると思われる反論はひとつも現れていない」⁽¹⁰⁾と感じていた。フィヒテはカント哲学すなわち「批判哲学をその精神に関して所有している」と確信するに至っており、その精神に関しては「カントもラインホルト⁽¹¹⁾も叙述しておらず、かつそれは「常に征服不可能な砦とみ

なされている」と捉えていた。このような事情の本質はフィヒテ自身には「ただぼんやりと」しているのみであったが、それが「ある独立的思索家と話をした折」、「第一原則そのものに関わる疑惑」という形で明瞭になってくる。

このフィヒテの「疑惑」はさらに「ある確固たる懐疑論者の著作を読むことで」⁽¹²⁾ ひとつの確信へと変わっていく。それは「哲学が学問といえる状態からまだはるかに遠ざかっている」という確信であった。それまではたんに「予感」のようなものでしかなかったものが確信されるに至り、その結果フィヒテは「今までの自分の体系を放棄し、より確固たる体系を目指さざるをえなくなった」のである。

この懐疑論者の著作が『エネシデムス』⁽¹³⁾ である。フィヒテ自身はこの著作を「ここ十年間の注目すべき所産のひとつに数え」⁽¹⁴⁾ ている。しかしこの高い評価は『エネシデムス』の内容そのものに与えられたものではない。『エネシデムス』で示されたカントやラインホルトへの反論によって、哲学がまだ学問と呼べるにいたっていないことがはっきりと理解され、再検討を余儀なくさせるからである。「これにより、カントやラインホルトの功績のあとでさえも哲学はまだ学の立場にはないことを確信するにいたりました」とフィヒテは述べている。『エネシデムス』はフィヒテを「長い間混乱させ」、フィヒテにおいて「ラインホルトを崩壊させ、カントを疑わしくさせ、自身の全体系を根底から覆してしまう」⁽¹⁵⁾ ほどの大きな影響を与えることになったのである。

自分の持つ体系が根底からくつがえされてしまえば、そのあとには「新たな体系をたてざるをえなくなる」⁽¹⁴⁾。今まで持っていた考えは「何の役に立たず、再びと開拓」⁽¹⁵⁾ されなければならなくなったのである。このことにフィヒテはしばらくの間取り組むことになる。この体系再構築においてフィヒテに確信されていたことは次である。第一に「唯一の原則から展開されることによってのみ哲学は学になりうるということ」⁽¹⁴⁾、次いで「そのときには幾何学と同様の明証性を確保しなければならないということ」、さらに「そのような原則は存在するということ」、そして最後に「それはまだそのようなものとしては提示されていないということ」である。

フィヒテにとっては新たな自己の体系を作り上げることもカント哲学の土台の上でのみ可能なことであった。カントは「そもそも正しい哲学を持っている」⁽¹⁵⁾ ということはカント哲学に触れた当初から変わらぬ確信であったが、そのカント哲学にもフィヒテにとって「疑わしく」思われる側面が現れてきたのである。しかしそれはフィヒテが哲学を学としてたてるための探究を続けることにおいて、次のような評価となってくる。このような探究を続けることで呼び起こされることは、ひとつには「カントに対するもっともすばらしい尊敬の念」⁽¹⁴⁾ であった。フィヒテの理解によれば、カントは「体系を所有する」のみで

あって、「体系を叙述はしていない」。このことはまた、「カントは真理を単に暗示したのみで、叙述も証明もしていない」⁽¹⁶⁾とも表現されている。このようなカントのあり方はフィヒテにとっては理解しがたいことであったようである。この時期書簡でカントに言及する際には、「カントは明瞭な意識をもって体系を所有しているのかどうか」、「カントには真理の根拠を知らせることなく真理を告げる守護神がついているのではないか」、「カントは同時代人に自己探求の功績を残し、自身はその道を示すというささやかな功績で満足しようとしていたのかどうか」等々の疑問を常に投げかけている。そして逆にこの点から、学としての哲学はカントが暗示したものを明確に叙述することによって可能となること、それは具体的には自己探求によって可能となるとフィヒテが考えていたことが読み取れるのである。

フィヒテはこの課題に取り組み、「六週間ほど」⁽¹⁵⁾後には「新たな基礎を発見しました」という言葉を書き送るまでに至った。この基礎からは「全哲学が極めて容易に展開され」、したがってこれが求められていた第一原則である。これはまた「人間精神の唯一の根源的事実」⁽¹⁶⁾とも表現され、この「事実のみが存在するのであり、これが普遍的な哲学とその二つの部門である理論哲学及び実践哲学を基礎付ける」と位置づけられて、その根源性が示される。カントはこの事実を確かに知っているということはフィヒテの確信するところであったが、しかし「どこにも述べてはいない」ために、その発見者が「哲学を学として叙述」することになるだろう考えられた。そしてフィヒテにとっては、それこそがカント哲学を正しく理解することにほかならないのである。

ここにいたってフィヒテの課題は、カントが暗示したのみで明確には語らなかつた真理を語るということとなる。すなわち、学としての哲学の叙述である。フィヒテによればカントはそれを知ってはいたが語ってはいない。それゆえ、カント哲学をフィヒテが捉えなおすことによってそこに学としての哲学が成立することになる。哲学者として名前を知られるようになったフィヒテは、この時期チューリッヒの著名人たちに哲学の私的講義を行ないながら、自分自身の哲学体系を構築することになる。「これは、哲学の概念と哲学の第一原則についての講義で、…同時に私の新しい体系の概観を与えるものです」⁽¹⁷⁾とフィヒテは述べ、その研究の方向を次のように語る。「カントの精神を超えてもはや探究の余地はありません。私のはっきりと明確にたてようとして望んでいる諸原則をカントはあいまいなままで自身のあらゆる探究の基礎においていたことを、完全に確信しております。しかし私は、カントの文字を越えていくことはできるだろうと期待しております。」⁽¹⁸⁾

カントの精神に立ちながらカントの文字を越えて哲学を叙述しようとしているフィヒテに、イエーナ招聘の声がかかる。自分の課題の遂行とイエーナ大学

での講義の準備という仕事が重なったのである。フィヒテにとっても学としての哲学の叙述という課題はきわめて大きなものであり、一気に著作を書き上げるということは困難であった。そこで考え出されたのが、「講義の間、聴講生のための原稿として、テキストを一枚づつ手渡していく」⁽¹⁷⁾という方法である。そうしてできあがったものが『全知識学の基礎』⁽¹⁾であった。

学としての哲学をフィヒテが構想していたように、『全知識学の基礎』では冒頭に第一原則、第二原則、第三原則が掲げられ、これらの原則に基づいて理論哲学と実践哲学が展開されていく。第一原則が一切の基礎であり、すべてを基礎付けるものであり、『全知識学の基礎』では「自我は根源的に端的にそれ自身の存在を定立する」⁽¹⁹⁾と表現されている。これは自己自身を自覚的に定立する自我の表現である。フィヒテによればこのような自我はすべての事実を基礎付けるものとしてそれ自身事実と呼ばれるよりも、むしろ「事行」⁽²⁰⁾と呼ばれるのがふさわしいとされる。

「事行」という表現はフィヒテの造語であるが、働きとその働きの結果とが同一であることを示す言葉である。フィヒテによれば、働きとその結果とが同一であるのは自我の自己定立のみである。「我あり」という働きと「我あり」という存在とが同一であると見る見方であり、ここにそもそも自我とその様々な経験が可能になるとする。したがってこの「我あり」は経験的な私の働きを示すものではなく、経験的な私の根拠としての絶対的な私の働きすなわち「絶対我」と呼ばれるのである。『全知識学の基礎』は絶対我を第一原則とし、絶対我を基礎として理論及び実践の領域を明らかにするものである。

フィヒテにとってこれがカント精神に立った学としての哲学の叙述であった。フィヒテ自身がカントの文字を越えていくと表現しているように、『全知識学の基礎』における哲学の叙述はカント哲学とはかなり印象が異なっている。フィヒテはどの点をカント哲学の精神と捉えたのであろうか。それは、カントが知っていたにもかかわらず叙述しなかった第一原則すなわち絶対我に他ならない。絶対我はカントがその哲学を3つの著作すなわち『純粋理性批判』、『実践理性批判』そして『判断力批判』に分けて示した人間理性のもっとも根本的なあり方であるとフィヒテは確信していた。カント哲学の用語で言えば、『純粋理性批判』における統覚の自我、さらには『実践理性批判』における定言命法としての自我に等しいといえるであろう。フィヒテ自身が『実践理性批判』における自由の概念や定言命法に大きく影響を受けたことから見れば、フィヒテの絶対我の叙述はカント哲学における定言命法の自律の概念を存在全体へと適応していった結果であると言えるだろう。

4. おわりに

フィヒテ自身は知識学というその体系をカント哲学と精神を同じくするものと生涯信じて疑うことはなかった。しかしながらカント自身の理解も歴史的な評価も、カントとフィヒテを含むドイツ観念論の哲学者たちとは基本的な考え方において大きく異なる点があるとみている。その相違点の中心が自我の位置づけであるが、フィヒテ自身はこの点をカントが表現しなかったカント哲学の基本と捉えたのであった。このことはフィヒテの著作からよりも書簡等の言葉から明確になるといえるだろう。そしてこの点を抑えておくことは、難解だといわれるフィヒテ哲学にアプローチする際の手がかりのひとつとなるであろう。

最後に、フィヒテの自我の特徴はその存在と定立作用とそれらの自覚との統一にあるということ、そして、その自我が経験界を構成する根源にあるということを確認しておく。フィヒテ自身はこれがカントが明確に語らなかった哲学の根本、人間の根本であり、従って世界の真実の姿であると理解している。しかしながらこのような観点からはカント哲学との接点よりも、私見ではむしろ仏教における理論的な世界観との類似性を感じる。

たとえば仏教では、眼という感覚器官と色(シキ)と呼ばれる対象、識(シ)と呼ばれる感覚作用とが接することにおいて、この現実の見える対象が成立すると考える。そしてこれらの働きは自我の根本の阿頼耶識(アラヤシキ)によっていわば作り出されたものであると見るのである。このような見方はフィヒテの自我と経験界の関係を想起させる。もちろん単純に対応関係が成立ということはないにしても、現実の位置づけには類似性が明らかになると思われる。

さらにフィヒテはあくまで哲学者であり、「語りえない」ものであっても「語る」という観点から理解しようとしていた。それに対して、仏教は言葉を離れる。このような大きな相違があるにしても、理論的に表現され、理論的に理解するレベルを問題にするならば、フィヒテと仏教とを比較検討することによってさらにフィヒテ哲学の特徴が明確になり、大きく言えば西洋の見方と東洋の見方の異同の側面が明らかになってくると思われる。今後の課題としたい。

注

(1)『全知識学の基礎』は知識学というタイトルを掲げた最初の大著であるが、これはイエーナ大学での講義において、フィヒテが聴講生のために一枚ずつ作成したテキストをまとめたものである。出版された『全知識学の基礎』には『聴講生のための手稿』という言葉が添えられている。

(2) J.G.Fichte: Gesamtaufgabe der Bayerischen Akademie der Wissenschaften, hrsg. von R. Lauth und H. Jacob, Stuttgart-Bad Cannstatt. III-1,

S.159. 1790年8月1日ライプツィヒのフィヒテから婚約者のヨハンナ・ラーンに宛てた書簡。同書簡からの引用が続く場合には注の付記を省略した。

(3) 同Ⅲ-1, S.222. 1791年3月5日ライプツィヒのフィヒテから弟のゴットヘルフに宛てた書簡。当時の様子を振り返ってそのように表現している。

(4) 同Ⅲ-1, S.165. 1790年8月上旬ドレスデンのフィヒテからフォン・ミルティッツに宛てた書簡。この書簡において、フィヒテは困窮状態を訴え、フォン・ミルティッツの援助を請うている。カント哲学の教えを求めた学生の名前はわかっていない。

(5) 同Ⅲ-1, S.170-171. 1790年9月5日ライプツィヒのフィヒテからヨハンナ・ラーンに宛てた書簡。

(6) (5)の書簡でフィヒテはヨハンナ・ラーンを安心させるために、生活ぶりを書き送っている。それによれば、以前は「遅くに起き」ていて「ルーズ」であったとあるが、志を実現するために、「5時起床」「11時まで研究」、「ギリシア語を教え」、また「4時から6時まで…走る」というような生活に変わったとある。

(7) 同Ⅲ-1, S.167-168. 1790年9月上旬ライプツィヒのフィヒテから友人のヴァイスフーンに宛てた書簡。

(8) 同Ⅲ-1, S.190-195. 1790年11月ライプツィヒのフィヒテから友人のアケリスに宛てた書簡の下書き。

(9) 同Ⅱ-1, S.415. 1791年7月10日のフィヒテの日記。

(10) 同Ⅲ-1, S.372-373. 1793年2月20日ダンツィヒのフィヒテからドレスデンの宮廷説教師ラインホルトに宛てた書簡。

(11) カール・レオンハルト・ラインホルト (1757-1823)。カント哲学を解説し世に広めるとともに、その後のドイツ観念論の方向付けとなる「根元哲学」を構想した。1787年イエーナ大学に招聘。その後任がフィヒテである。

(12) 同Ⅲ-2, S.14-17. 1793年11月チューリッヒのフィヒテからヴレーマーに宛てた書簡の下書き。

(13) ゴットロープ・エルンスト・シュルツェ (1761-1833)。匿名で『エネシデムス』を出版。懐疑論の立場からカントやラインホルトを批判し注目を浴びた。

(14) 同Ⅲ-2, S.17-18. 1793年11月あるいは12月チューリッヒのフィヒテからチュービンゲン神学校の員外教授ヨハン・フリードリヒ・フラットに宛てた書簡の下書き。

(15) 同Ⅲ-2, S.27-29. 1793年12月(中旬)チューリッヒのフィヒテから家庭教師時代からの友人ハインリヒ・シュテファニに宛てた書簡。

(16) 同Ⅲ-2, S.19-22. 1793年(12月)6日チューリッヒのフィヒテから

イエーナのフリードリヒ イマニュエル ニートハンマーに宛てた書簡。後にフィヒテはニートハンマーと雑誌を刊行することになる。

(17) 同Ⅲ-2, S.70-73。1794年3月1日チューリッヒのフィヒテからワイマールのギムナジウム校長ベッティガーに宛てた書簡。

(18) 同Ⅲ-2, S.89-94。1794年4月2日チューリッヒのフィヒテからワイマールのギムナジウム校長ベッティガーに宛てた書簡。

(19) 同Ⅰ-2, S.261。

(20) 同Ⅰ-2, S.259。